

画商ポール・デュラン＝リュエルの英国における活動とその意義

玉生 真衣子 (東京大学)

画商ポール・デュラン＝リュエル (1831-1922) が印象派の擁護者であったとの認識は今や幅広く共有されている。しかし、彼が印象派の価値を世に知らしめた立役者であるとする見方は、既に印象派の評価が確立している現在から遡行した結果論に陥る危険性をはらむ。実際に彼の市場戦略が、国際的、間-市場的なダイナミズムの中でいかに形成され、前衛芸術という枠組みのもとで作品の評価を高める手法がいかにして確立されたか—こうした動的な諸側面に着目した具体的な議論は未だ十分に尽くされているとは言い難い。

モダニズムと美術市場の関係を説いたロバート・ジェンセンは、デュラン＝リュエルを「イデオロギー的画商」の先駆と捉え、私心のない同時代美術のパトロンとして印象派を擁護する振る舞いが、他の同時代画商にはないアイデンティティを彼に付与したとする。本発表はこうしたジェンセンの研究を参照しつつ、その考察の対象から抜け落ちている 1870 年以降の英国における活動の詳細に焦点を当てる。そして「イデオロギー的画商」としての彼の行動様式の基礎は、ジェンセンが述べるように 1860 年代におけるバルビゾン派への投機的成功によってのみではなく、ロンドンでの展覧会開催や作品売買といった活動を通じて、より強固に築かれたという点を指摘する。

デュラン＝リュエルが 1870 年の普仏戦争勃発を受けロンドンへと疎開した当時、ロンドンではパリに先んじて形成された美術市場が活況を呈していた。入場料を設ける展覧会の形式や、批評家の序文が掲載された展覧会カタログといったシステムがいち早く確立され、デュラン＝リュエルも自らの展示にこうした方式を取り入れることで市場開拓の足掛かりを作った。

また彼の商業的関心がより同時代の美術へと移った契機として考えられるのが、彼と同様にロンドンへと疎開していたモネやドービニーを含むフランス人画家のコミュニティとの接触である。彼が「フランス人芸術家協会」を立ち上げ、その名を冠した展覧会を開催したことは、彼の商業的、投機的意図が前面に出ることを巧みに回避することに繋がった。「前衛芸術としての印象派」というナラティブの伝播を加速させたという点で、「協会」の立ち上げ自体が、結果的には営利的な目的に即した選択であったと言える。また、ミレーやドラクロワの作品をはじめとする当時の著名な油彩画と、前衛とを並置して展示することで購買者の目を惹きつけ、同時代画家の作品を引き立てるといった効果的な演出手法には、後の「印象派展」につながるイデオロギー的戦略の萌芽が見出される。

本発表では、こうした論点を踏まえ、デュラン＝リュエルの渡英以降における市場戦略の形成過程とその変遷を再検証する。さらに彼個人の行動様式の変化を、国境を越えて流通網が拡大しつつあった前衛美術作品をめぐる市場システム自体の生成、変化の一断面として捉え直すことを試みる。